
100円キャンディボックス

かつお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100円キャンディボックス

【Nコード】

N4035I

【作者名】

かつお

【あらすじ】

100円シヨップのできごと。

CANDY - BOX MAGIC

私はたまたまそこに居合わせただけだった。

でも、私は大変なことになってしまった。

誰も聞いていないと分かっているのに、口から言葉が出る、

「どっしょっしょ。」

泣いても意味はないのに、目から涙が出る。

こんなことになったのは、ほんの3日前のある出来事のせいだった。

2

「みて！リナ！このキャンディボックス超かわいいー！」

私は、100円均一の商品棚に並んでいるオレンジ色のキャンディボックスを指差して言った。

「ほんとだー！うわー、超かわいいー！」

リナはキャンディボックスを手にとって見ていた。

「これは買いだねっ。」

私はこのキャンディボックスを持って、レジへ向かった。

「え？もう帰るのお？」

とりナ。

「うん。ウチお母さんもお父さんもいないしね。」

「そっかあ…。大変だね。いつでもウチ泊まりに来なよ！」

リナはほんとに優しい。でも私は…。

「ごめんね。拓也を1人にしとくわけにはいかないから」

拓也とは私の双子の弟だ。

親をなくしたときも、拓也と2人で生きてきた。

「うん。大変だね。ミイもがんばってね」

何も知らないから何も言わない

105円で買ったオレンジ色のキャンディボックス。

それと一緒に飴をいくつか買った。

“キャンディ”ボックスだから、中に飴を詰めて、拓也にあげようと思ったから。

「じゃあねー、ミィ」

「うん、バイバイ、リナ」

私は少し暗い夕方の道を走って帰った。

「あー、あつつう…：ただいまあ」

玄関でローファアを脱ぎ捨ててリビングに向かう。

「拓也っ、ただいまあ」

拓也はイヤホンをつけて音楽を聴いていたらしく、まったく返事をしない。

「拓也っ！！！！た・だ・い・ま！！！！！！」

ようやく私の姿に気付いた拓也は

「あ、ミイ姉おかえり。飯できてるよ。食べようぜ」

あれ、今日の炊事当番は私じゃなかったっけ？

「いいのいいの。実際ミイ姉のより俺のやつのほうが美味しいっしょ？」

ぐぬぬ…。たしかにそうだけど…。

「じゃあ、私が持ってくるから拓也は座ってまってて」

私はキッチンにむかった。

ガス台には白くてデカイ鍋がかけてあって、中にはクリームシチューが入っていた。

「たーくやー！ご飯とパンどっちがいい？」

リビングのほうから、パンー、という声が返ってきた。

私はトースターに食パンを入れて、その間にお皿にシチューを盛り付け、トースターからパンをとり出した。

あっ…そういえばキャンディボックス。

今ここで詰めちゃえば拓也に気付かれないよね。

そう思った私は、こっそり廊下に出て鞆を持ってきた。

キャンディの袋を取り出し、封を開けて思いっきりキャンディボックスにつっこんだ。

あれっ…、と思わず口に出してしまった。

キャンディじゃなくてキャラメルだった。

これはキャラメルボックスじゃないよ…。

がつくりしたが、今ここでこんなことで悩んでも仕方がない。

ま、キャラメルも美味しいしね。

「おまたせーっ」

私はお盆にシチュー×2、食パン×2、それとキャンディボックスと、それに詰まったキャラメルを乗せて運んだ。

「な？美味そうだろ？」

いますぐぶっ倒したくなるくらい馬鹿にされたようない方だった。

でも、美味しいのは事実だった。

…。

「あっ、そっだ拓也っ」

HELP

拓也にキャンディボックスを渡したその瞬間だった。

私はキャンディボックスを手にとり、拓也に渡した。

「中味、キャラメ…」

キャンディボックスがポトリと落ちた。

ガシャンという音。

そしてふたがあいて、中からオレンジ色のキャラメルたちがいっせいに外に出る。

「拓也…?」

拓也はいなかった。

どうなっているのか、分からなかった。

「…。拓也?あれ?」

気がついたら、拓也がいなくなっていたのだ。

私は床に落ちたキャラメルとキャンディボックスを拾い、中に戻してふたを閉じた。

おかしい。

世の中はいつ狂ったのだろう。

「拓也?どこ?」

私は拓也の椅子を見た。

椅子の脚に模様とも文字とも何ともいえぬものが書いてあった。

他の椅子にはこんなマークはついていなかった。

不思議に思っていると、キャンディボックスの中からカタカタという音が聞こえた。

地震でゆれるような、そんな音。

びっくりした私はキャンディボックスのふたをあけた。

「…。」

おかしい。

世界はいつ狂ったのだろう。

さっきからそう思ってたばかりだ。

えっと…、ふたを開けて…

気がついたら、ここに倒れてた。

ここは、世界のどこかも分からない。

地面はボコボコしてて赤茶色。

土とも石とも言えないくらいの微妙な質。

植物はまったくないし、当然人影なんてない。

あるのは1本の口紅だけだった。

その口紅は、口紅というより赤めのリップグロスという感じだった。よく見たらリップスティックではなく、リップスティックのカタチをしたプラスチックの先端からリップグロスが出ているだけだった。

そのリップグロスのキャップには油性のマジックで「約束」と書いてあった。

私はそれをポケットに入れて、歩き出した。

暗いんだけど、夜の感じとは少し違った。

ちゃんと自分の手足がはっきり見えるし、

空には太陽が上がっていた。

太陽ではないのかもしれないが、私の知っている太陽に似ていたからそう決めた。

歩を進めると、その先には小さな女の子がいて、近寄って話しかけてみた。

「あ…、ここ、どこだか分かる？」

女の子がこくりと頷いた。

「教えてくれない？」

女の子は首をぶんぶん振った。

どうして、と私が聞くと、走って逃げてしまった。

「はあ、どうしたらいいのさ…。」

私は疲れて、その場に倒れこんだ。

携帯

7時

拓也はまだ見つからない。

おまケにここわすごく寒い。

死にたい。

あたしは拓也以外に生きる理由カ`ない。

7時30分

好うざい。あんなやつ死ねばいいのに。

幸せそうな顔して。

あたしカ`親いないツて知ってるみたいに言つて。

つらいんだよ。わかんないのカナ。

わかんないよね。あんなカ`きにわかるわけないよね。

あたしカ`ばカだったよ。

8時15分

転んだ。いたカった。

ここ土わすごくカたい。

持つて帰つて金魚の水槽にでも入れようカナ。

9時

いつたいいつまであたしわ歩き続けるの。
もう嫌。

だケど、まだ拓也わ見つかってない。

あたしわまだここで立ち止まるわケにわい力ない。

9時3分

拓也がいた。

でも拓也ぢゃない。

誰？誰なんだろう？

もうこんなの嫌。

あたしわ本物の拓也にあいたい。

神様お願い。

9時30分

拓也に殴られた。

そいつわ絶対拓也ぢゃない。

痛いよ、拓也。

気付いてよ。あたしだよ。

あたしわ本物だよ。

ねえ、喋ってよ。

9時53分

血、血、血。血カ、欲しい。あたしの血！……！！……！！
足りない！！足りないの！！……！！……！！……！！……！！

拓也。。。そうよ。。。拓也から奪うUかない！！！！！！
その血を持ってあたしの苦しみを…！！！！！！
こゝ

この記事は、途中で作成が中止されたものの、公開が決定されていたため、公開されました。編集するには、「編集」をクリックしてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4035i/>

100円キャンディボックス

2010年12月30日21時04分発行